

## 東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議（第4回）議事録

- 日 時：平成27年6月3日（水）15:00～17:00
- 場 所：ふくしま中町会館 6階 北会議室
- 出席者：別紙出席者名簿のとおり
- 要 旨：以下のとおり

### 1 開 会

### 2 議 事

#### （1）中間報告案について

#### 【第3回会議における主な意見について】

（事務局）

資料1及び前回会議議事録に基づき、前回会議における主な意見等について説明。

※議事録の中田委員の発言要旨の一部について、同委員から修正の必要性が指摘され、修正することとされた。

#### 【中間報告案の取扱いについて】

（小沢会長）

- ・当有識者会議では、イノベーション・コースト構想に反映させることを目的に、6月に中間報告を出すということで議論してきたが、これまでの内容を踏まえると、もっと議論を深めたほうがよいと思われる。事務局からは、施設の規模等について示してもらったが、議論の中で規模感が先行している感じがある。もっと施設の内容を詰めていく必要があるのではないかと思われる。また、基本理念にある「復興の加速化への寄与」は新しい機能であり、もっと内容を詰める必要がある。イノベーション・コースト構想との関係を考慮すると、まだ時間の猶予があるようなので、不足していると思われる部分について、もっと議論を深め8月を目途に最終報告として取りまとめるほうがよいと思われるが、事務局では何か考えがあるか。

(力丸課長)

- ・議論を深めていただくことは、事務局としてもありがたいことと考える。
- ・今回とりまとめるのではなく、8月を目途に報告としてとりまとめていただければよろしいかと考える。

(小沢会長)

- ・規模や整備費に関する議論も必要ではあるが、もっと施設の内容について議論を深めていかないと、具体的な整備の議論に入らないのではないかと。比較対象として、中越や神戸、広島や長崎の類似施設が挙げられたが、各々の施設の性格の違いをもっと明らかにし、議論を深めていくことが大事である。各委員の意見はいかがか。

(中田委員)

- ・これまで様々な意見が各委員から出されたが、100年単位の期間で通用する施設、世界的に通じる施設として位置付けたいとの話もあったことであり、また、このような施設を造ることを検討できる機会もなかなかないので、もっと丁寧に議論する機会をいただければありがたい。

※各委員了承。

(小沢会長)

- ・それでは、さらに議論を深めていくことで、各委員の御協力をお願いしたい。

### 【基本理念について】

(小沢会長)

- ・本日は、資料2の内容について、今までの意見が反映されているかどうかチェックしながら議論を進めたい。
- ・基本理念については、中越や神戸の例も参考にしながら、「未来への継承」、「世界との共有」、「防災・減災」、「復興の加速化への寄与」をキーワードに整理してあるが、各委員の意見はいかがか。

(澤田委員)

- ・施設が存在することで、地域で暮らす人、生活再建を目指す人の支えになる機能が入っていることはよいことである。しかし、今回の震災ではまだ生活再建のスタートラインに至っていない方々が多数存在する。中越や神戸の場合は、災害の発生から復旧・復興までの時間の流れが不可逆的であり、状況

把握が容易だったが、今回は災害が継続中とも言える状況であり、被災の概要が未だ固まっていない状況である。このような流動的な状況の下で、これらの状況を施設の内容にどのように反映させていくのか、しっかり考えていく必要がある。場合によっては、施設発足時にも生活再建に至らない方々がいるかもしれない状況の下で、それでも被災者の心の拠り所になるような機能があればよい。

(中田委員)

- ・ 大事な指摘である。すでに生活再建への努力は始められており、このことを対外的に発信することで、風評の払拭に結びついていけばよいと思う。
- ・ 展示の内容も、状況に合わせてリニューアルすればよい。

(馬場委員)

- ・ 生活再建は行政にとっての大きな課題。
- ・ 施設ができた後も、状況は刻々と変化していくと思うので、このことをうまく展示等にも反映させることができればよい。

(藤沢委員)

- ・ 国の資金で造ることになると思うが、住民から遠い存在にならないよう、生活再建に資するような施設にしてほしい。地域住民が運営に関与できるよう、地域コミュニティの再生に資する施設にしてほしいと改めて思う。

(圖師委員)

- ・ 10年後、100年後も継続する施設という議論があった。被災地に立って、現時点で私達が思い、感ずることと、20年後の後世の人が思い、感じることは違ってくるだろう。
- ・ 長期スパンで考えると、基本的な理念は変わらなくても、住民の方々が未だ避難から戻られていない時点、戻られてから次の段階に移った時点、さらに長期といった時の流れに応じ、アーカイブ拠点施設の中身は変わっていくものだという視点を持つことが必要である。

(小沢会長)

- ・ 各委員からの指摘を考慮に入れながら、さらに今後も議論を深めたい。

【機能1から機能3について】

(小沢会長)

- ・次に、施設の機能とエリアについて検討したい。

※ここで、中田委員から質問があり、事務局から資料の内容について説明。

(澤田委員)

- ・機能1について、情報発信に拘らなくても、正確な情報が客観的に公開されていれば十分だと思う。一番気になるのは、機能2について。伝達メディアについて触れているが、現代においては、最新の情報技術でも3年もすれば陳腐化してしまうので、経済性も考えると、3DやARのような情報技術そのものよりも、「物語」を作ること、何をどう見せるのかというコンテンツの方を重視した方がよいと、中越での自分の経験に鑑みて思う。
- ・既存の類似施設でも、陳腐化した後、更新費用の工面に苦勞する事例がある。

(小沢会長)

- ・アウシュビッツでは、事実のみを淡々と見せられて、後は各自が自分の頭の中で内容を構成するという仕掛けになっていた。今回のアーカイブ施設においても、そのような仕掛けが大事かもしれない。

(藤沢委員)

- ・福島の状態について、それなりに発信されていると思うが、それでも東京辺りでは情報が流通していないので、外部への情報の伝え方には工夫が必要であり、また、既存のアーカイブ施設との連携が大事だと改めて思う。
- ・情報技術ARについては、もはや陳腐化していることを考慮したほうがよい。
- ・情報の伝え方には難しい面もある。様々な意見を尊重すると、中庸的というか平板なものになってしまうおそれもある。特定の方、プロフェッショナルな技量を持つ方にプロデュースしていただく必要がある。

(圖師委員)

- ・私も、最新の情報技術で造られた展示施設が短期間で閉鎖されてしまった事例をいくつも見てきた。その要因を伺ってみると、単一のソフトにかなり依存してしまったところに理由があるようであった。ソフト自体の陳腐化が施設そのものの陳腐化につながってしまうようである。気をつけなければならない視点である。
- ・収集した情報は、当然ながら公開することが前提になる。そのうえで、情報

をいかに見てもらえるか、どうしたらアプローチしてもらえるかという工夫が必要であると思う。情報検索の技術も発達しているので、他の拠点とのリンク等を上手に活用するなどの工夫が必要である。

(馬場委員)

- ・ 正確でリアルタイムな情報発信に関しては、復興過程を可視化することが大事である。また、人々の生活の営みの復活、町の復興の様子、イノベーション・コースト構想による最先端の取組についても発信してほしい。さらには、ふるさとを離れてしまった方々を意識した情報発信もお願いしたい。
- ・ 訪れる多くの人々に効果的に伝える展示に関しては、視覚と体感を大事に考えてほしい。よって、震災遺構や遺物のような実物による展示が必要であり、避難生活の仮設住宅でどんな生活を強いられたかなど、例えば、仮設住宅での生活を再現することも一つの考えである。
- ・ 後世に正しく伝える教育に関しては、次世代を担う子どもだけではなく、大人も含めて、生涯教育の視点を持つことが大事である。そのうえで、国内各地の教育や世界の教育と連携していくことが大事である。

(中田委員)

- ・ 後世にどう伝えるか、原発震災とは何だったのか、私たち自身が明確な回答を持っていないと思う。ゆえに、探求していくプロセスが非常に重要で、これにより風評被害に対応する力もつくことになると思うので、やはり生涯教育の要素は不可欠である。多くの方々に来てもらい、実態を知ってもらい、次世代に伝えていく、これらの点で生涯教育の要素が必要である。また、被災者自身も施設の運営に関わることで、震災を相対的に捉え直し次世代に何を伝えていくのかを考えることにもなる。

(小沢会長)

- ・ 説明については、最近の博物館では、コミュニケーターやトランスレーターといった職種がある。また、被災者も説明において、重要な役割を担うことができる。なお、被災の印象が強く残っているうちに被災者を組織化しないと、状況を後世に正しく伝えられなくなるおそれがあるかもしれない。
- ・ 伝えるべき相手が地域の人々を含む大人や各自治体の職員となってくると、研修の要素が加わり、研修コースの設置のような収入面に関わる話になる。
- ・ いずれにしても、何をどのように見せるか、ブラッシュアップが必要である。

**【機能4について】**

(中田委員)

- ・最初に物語を作るとの話があったが、被災者を含めて、生涯学習の側面がないと物語は作れない。経験したことをどう評価し、どのように伝えるかというステップが大事になってくる。定まっていないことにどう対応したかという経験が、叡智、復興知につながっていく。研修や学校教育に生かすことができるような内容を、誰がどのように作っていくかという視点が要である。その際には、専門的な知見と同時に、日常生活で何が起きていたかを示す視点で作ることも必要であり、加えて、これらを総合的な視点でコーディネートしていくことが大切である。さらに、施設には企画実施委員会のようなものを設け、各自治体と連携し、内容も適宜更新していくようなことが必要である。

(小沢会長)

- ・大学のシラバスに相当する話である。自分たちが達成すべき目標を意識しながら、内容を考えていく必要がある。この視点は、特に教育旅行などに必要になってくる。このような努力により、来訪者が増えていくと思う。

(馬場委員)

- ・ある仮設住宅の自治会が避難の際の状況を紙芝居で再現したが、それを広島市の松井市長に話したら、ぜひうちの高校生に紹介したいとなり、学生さん同士で伝え合っているようだ。様々なコミュニティを通じた交流について、その仕組みを作ってもらって行うことは、大変有効である。現に広島市との交流において実践されている。

(藤沢委員)

- ・福島への支援がまだできていないと思っている企業から、今からでも何かできないかという相談をいただく。ある程度、中長期にわたって関わることを、企業も視野に入れていると思われるので、福島からも関わりを求めていき、ある程度の素地を作ることが非常に大事である。
- ・拠点自体の整備はもう少し後になると思うが、福島の復興の象徴、情報発信の源となるので、様々な企業とのつながりを積極的に進めていただきたい。
- ・地域団体やNPOなど、様々な団体も関われるような窓口・受け皿をこの施設にぜひ作っていただきたい。
- ・展示は大事だが、施設の前後の場所、ボランティアをすとか観光すとか、周辺も含めて何かメニューを提示できるようなものも考えてほしい。

**【機能 5 について】**

(中田委員)

- ・(機能 4 について) 学校教育の話をするときに、要支援の子どもたちが震災をどう過ごしたのかを残し、次の震災の時にどのような支援が必要なのかを考える際の財産とすることが、次世代のために必要である。可能なら情報提供は必要。社会的弱者のことなどについて、特別支援学校にいる先生たちは知りたいかもしれない。

(小沢会長)

- ・聞き取りなどをしておかないと、子どもたちも 5 歳は年齢を重ねているので、保護者などに情報をいただいたりしながら記録を残していかないといけない。

**【機能 6 について】**

(圖師委員)

- ・具体的な保存について、タグ付けや、どのような分類、検索方法を工夫するかを考えるべきである。それが外部の方々がインターネットでアクセスした際の使いやすさにもつながる。
- ・「外部で安全にバックアップする体制について」は重要である。何処で一次情報を恒久的なものとして保存するか。アーカイブ拠点施設に保存するものもあろうし、他の拠点に保存されるものもあるので、どう連携を取るかの仕組みが重要である。
- ・機能 1～7 については独立したものではなく、それぞれのエリアにおいて所要の機能が連携することとなるを考える。

**【機能 7 について】**

(澤田委員)

- ・細かい研究テーマを羅列するのもよいが、もう少しメタな概念、哲学的概念になりそうなことを大きな研究の柱に据えておいてほしい。
- ・原子力災害の被害の確定は、どこで行われるか分からないので、原子力災害の被災とはどういうものなのかということ、いろいろな研究の知見を集めて議論してほしい。
- ・「復興」とは何なのかを、知見や支援や実績を通じて議論してほしい。復興は明確な定義がない。その時々を感じることも違う。そのときによいと思っていたことが、後からになると全く何も関係無かったとかいうこともある。

- ・原子力災害の被害は何かということについては、実際に被害に遭われた住民との関わりが欠かせないので、そういう方の参画が必要だし、復興については復興を支える支援員やNPOの、どの時点でどう考えてどう支援したかの共有や議論の場が必要なので、そういう方たちを巻き込みながら、福島復興には何をすればよかったか、何をしてどうなったか、ということ議論して発信してほしい。
- ・会議室やミーティングスペースを研究員のためだけの場所にするのではなく、一般の人が来るようなところで議論しているような雰囲気があってもいいのかなと思う。
- ・風評被害という言い方をしているが、実は非常に難しく、原子力災害という現象に対するいろいろなモノの見方なのではないかと思う。福島から見れば風評被害だが、他の地域からいろいろな意見を発する人たちにも考え方がありそうである。福島がどういう言われ方をしたのか、どんな誤解が生まれたのかということ整理しておくことが大切である。我々はこういう被害を受けた、こういう言われ方をしたということ整理すること。今の時期に言うのは適切でないかもしれないが、広島でも、被爆して差別された歴史が、今の展示に組み込まれている訳で、「いわれ無き」ことの整理も必要、誤解だというばかりではなく、あえて真正面から見つめてみるのも福島だからできると思う。

(中田委員)

- ・難しい問題だが、その点に取り組めるのであれば、歴史に残る施設になるという期待もある。例えば、ビッグパレットふくしまでは、高齢者、女性や子供に危険なことをさせないと言った「善意」からのことではあるが、当初、これらの方々が避難所の運営に主体的に参画できず、二次的なストレスを抱えることになった例もあるので、こうした事例からもたらされる反省を次の震災に生かすことができる。また、娘さんのいる家族の一例として、福島に住んでいたことがわからないよう2回引っ越しをするというような、原発震災に起因する人権問題の話も聞いている。

(馬場委員)

- ・昨今、火山噴火で避難中に一時帰島した報道を見て、ふと思いました。原発事故のとき、10 kmとか20 kmの半径を描いて避難させられたが、残念なのは、10 km以内の海岸沿いは実は放射線量が低かったのに、津波に遭われた方を救助もしないで撤退してしまった。もし、このことから教訓を得るとすれば、線量が低ければ一時帰宅を認めるとか、捜索活動などもできたということ。教訓を体系立てて役立てるようにすることがつくづく大切だと実感させられ



た。

(藤沢委員)

- ・施設ができるのが2020年頃としても、様々な取組は継続していると思う。双葉町や大熊町、南相馬市などで復興支援等をしているが、そういった取組すべてを、研究として残しておくべきものだし、テーマになり得る。行政を含め様々な取組について、連携して情報の集約をしつつ、団体と連携して研究を行っていただければ、リアルタイムで進行している復興を研究する特色ある場になっていくと思う。

(圖師委員)

- ・アーカイブ拠点施設での研究テーマをどのように決めていくのか、今後の検討事項であろう。災害に関する技術的な研究テーマは他機関でも実施しているものもあると考えられるので、拠点施設での研究テーマとして何をとりあげるのかがあろう。
- ・また、研究テーマを決めてそれに基づいて研究員を募集するというやり方もあるし、施設の専属の研究者が実施することもある。
- ・研究というと専門家が実施する研究がまず想定されるが、この施設は地域のための施設でもあるので、予算の手立ても必要であるが研究テーマを公募する、その対象の中に地域の方や生徒さんが入ることも考えられないか。そうしたことで地域の方に地域のアーカイブ拠点施設と感じて頂く、という工夫もあるのではないかと思う。
- ・展示の仕方も一つの研究テーマになるのかもしれない。

(中田委員)

- ・何を集め何を伝えるかという機能と同時に、さらにそれらをリニューアルしながら進める機能をきちんとビルトインする検討、工夫が必要である。地域の方が、世界的な研究の水準と接点を持てる場面があると、より継承されていくと思う。研究と、例えば語り部の力量形成がうまくかみ合うようなプロセスもあると、原発災害への理解が県民の間でも深まっていくと思う。

#### 【組織運営について】

(圖師委員)

- ・全体を俯瞰して見るという観点で企画グループを設けていただいたものと理解。これまでの議論でのコーディネータ、コンシェルジュということを検討するのもこのグループなのだと思う。

- ・展示エリア等に IT 技術という言葉が入っているが、情報発信も含め俯瞰して見る者が必要と考える。

(澤田委員)

- ・若手の研究員が来やすい環境とはどのようなものかを整理した方がよい。奨学金の免除職になるとか、科研費に応募できる機関であるとか、ポスドクの人が来てくれる建て付けが必要である。
- ・企画も、すべて自分たちでやるのではなく、外部の力を借りて、出向してもらおうという方法もある。例えば、NPOやNGO、民間の人を期限付きで人件費だけで来てもらえれば、ネットワークを含めて活用できる。

(小沢会長)

- ・メッセージ性を持ったリーダーシップは非常に重要である。地域の方との連携や交流もうまくいくような方に施設長になってもらうことが必要である。

(藤沢委員)

- ・企業が東北に研修に行くケースはある。企業は課題があるので行くのであり、自分が知っているだけでも 20~30 はある。福島を課題先進地域として位置づけ、現場も見られるプログラムとして作るのはありかもしれない。

(中田委員)

- ・研修方法の中でも、ラウンドテーブルのような少人数の討議が、効果的だと思う。”グループを作って”と表記があったが、そのようなイメージだと思う。

(圖師委員)

- ・展示交流エリアについて、東電との連携をどうするかは大きなテーマ。また、他の機関についても同様のことが言える。これからの具体的な内容を詰める際のテーマである。

(小沢会長)

- ・それでは、本日の議論に基づき、8月末を目途にまとめることとする。

### 3 その他

事務局から、次回会議の開催日時及び開催場所については、調整のうえ連絡する旨を伝達。

### 4 閉 会